

つがるの昔っこ (昔話) ⑨

マタギの十兵衛 (標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ

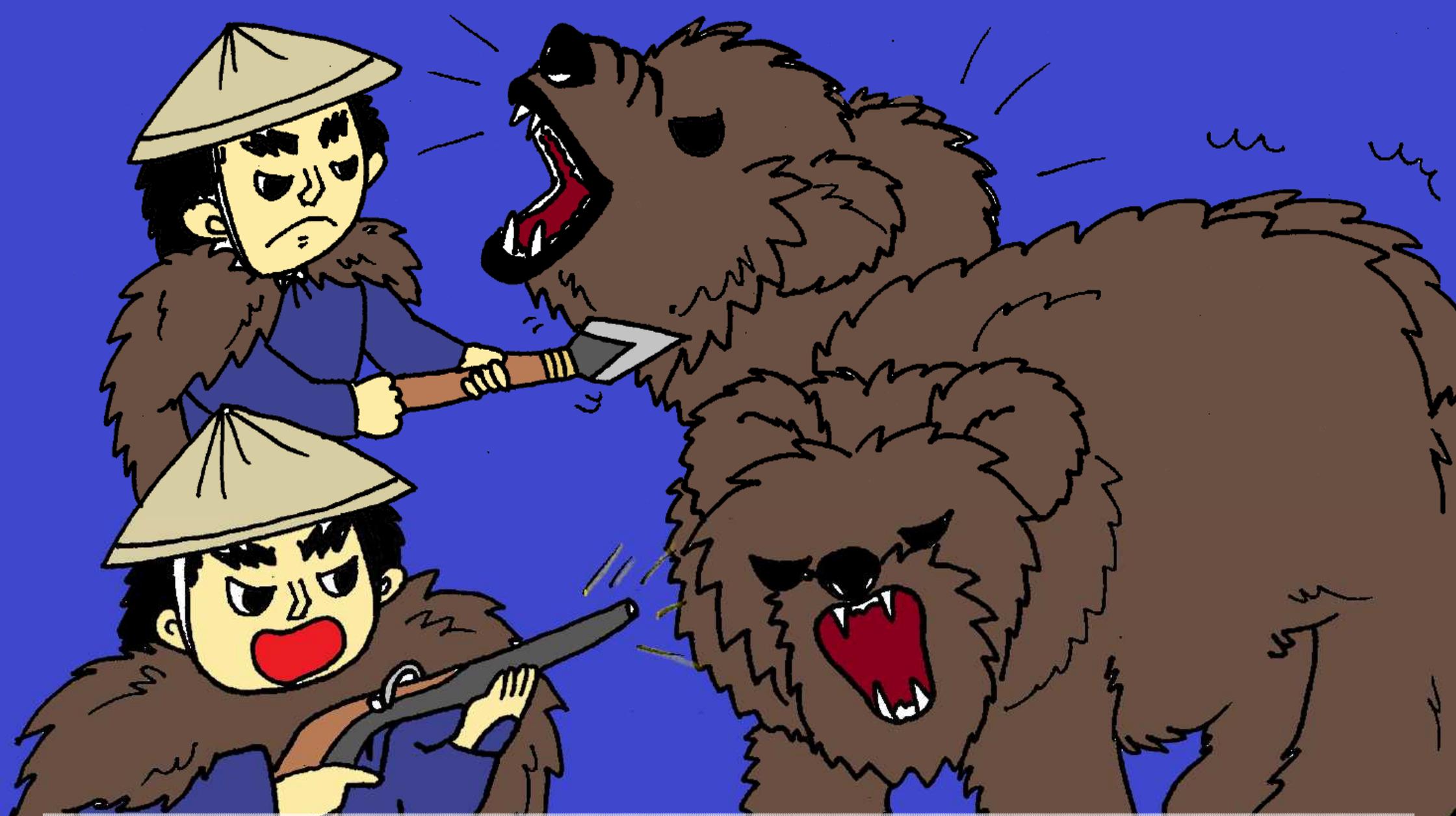


昔、目屋の村に大変腕の立つ鉄砲撃ちの名人が居ました。狙った獲物、一匹も逃したことが無い腕のいい男で『十兵衛』という名前でした。この十兵衛がワガママでワガママで、人がこうだと言えば、そうじゃない、そうじゃないと言えばそうだと言う、へそ曲がり者でした。

こっそりと行ってみたら、今まで見た事もない大きな熊が、ゴロン、ゴロンゴロンと転がって歩きながら、唸り声をあげていました。年のいったマタギが『熊、今、眠っている時期なのに、ああして苦しんで、咆（な）いて、ありやあ余程重い病に取り憑かれた熊だ』って言いました。



『昔から病持ちの獣、殺すな』というマタギの掟がある。さあ、行こう、行こうと言うと。



十兵衛が『なななな、何という話だ、こんな大きな宝物、捨てて行くってか。どこにそんな話があるかい』と、皆の反対を押し切って、鉄砲を向けました。

ズダーンと撃ったら、熊、ビーンと起き上がり、入り口めがけてダダダダダと来た。

『ウワー』あとのマタギ達は逃げました。十兵衛は背中に背負ってる山刀を抜いてドーツと熊を突きました。

すると、熊が斃（たお）れました。十兵衛は胸を裂き、早速、熊の肉を取ることにしました。

『愚か者達めが、こんなに良い熊の、こんなに良い肉を取らないなんて、まーま、うちの村のマタギはずぐなし、やずなし、ほんつけなしの三無しだ』づぐなし、やずなし、ほんつけなしと言って、津軽でそんだけ持っている人を三無しと言うそうです。



腹を割いて、肉を取ってみたら、臭くて、臭くて、臭くて、何も食べられません。『くそー、やっぱりこりゃ、病の熊だ。仕方ない、肝を取るか』山刀でウーッとえぐると肝を両手で持ち上げたら、指の間からダラダラダラダラと零（こぼ）れました。

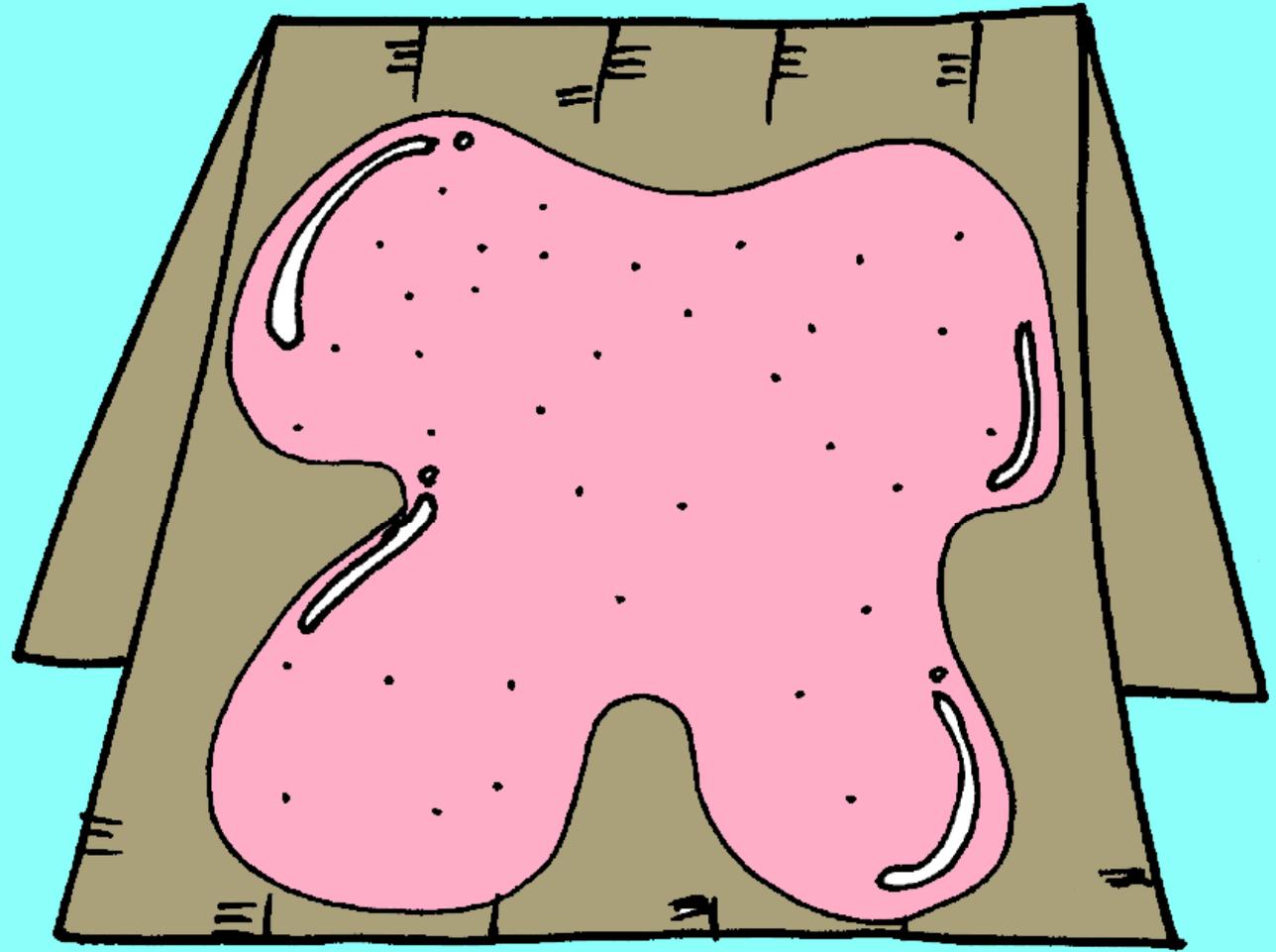
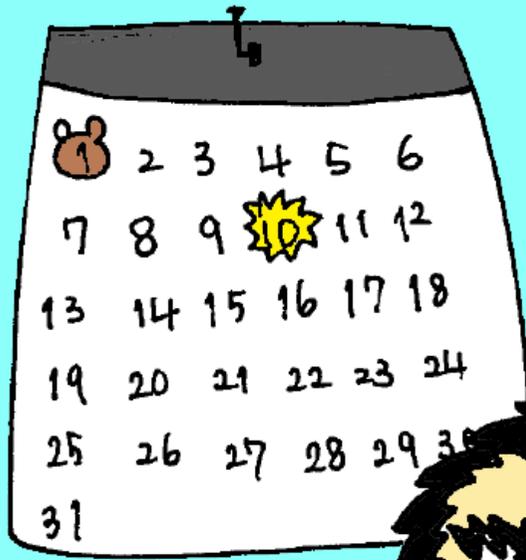
『ウワァー、肝も持ち帰れないのか。それじゃ仕方ない、皮を持って行こうか仕様がなしなので、皮を剥（は）いで、ぐるぐるぐると丸めてそれを担いで家に戻ってきました。』



そして、大きな戸板にバーンと張って、干して置きました。次の日の朝に起きて見たら、皮がぼつと1カ所抜けていました。『ありやりにやりにや、これは困ったな、やはり病気あるからだろうか』と思いました。次の日になったら、又ぼつと抜けました。又抜けました。

『そら見ろ。病持ちの熊を捕って来てからそうなるんだよ。これはきっと罰があたるぞ、いい事無いぞ』と、村の人は噂をしました。

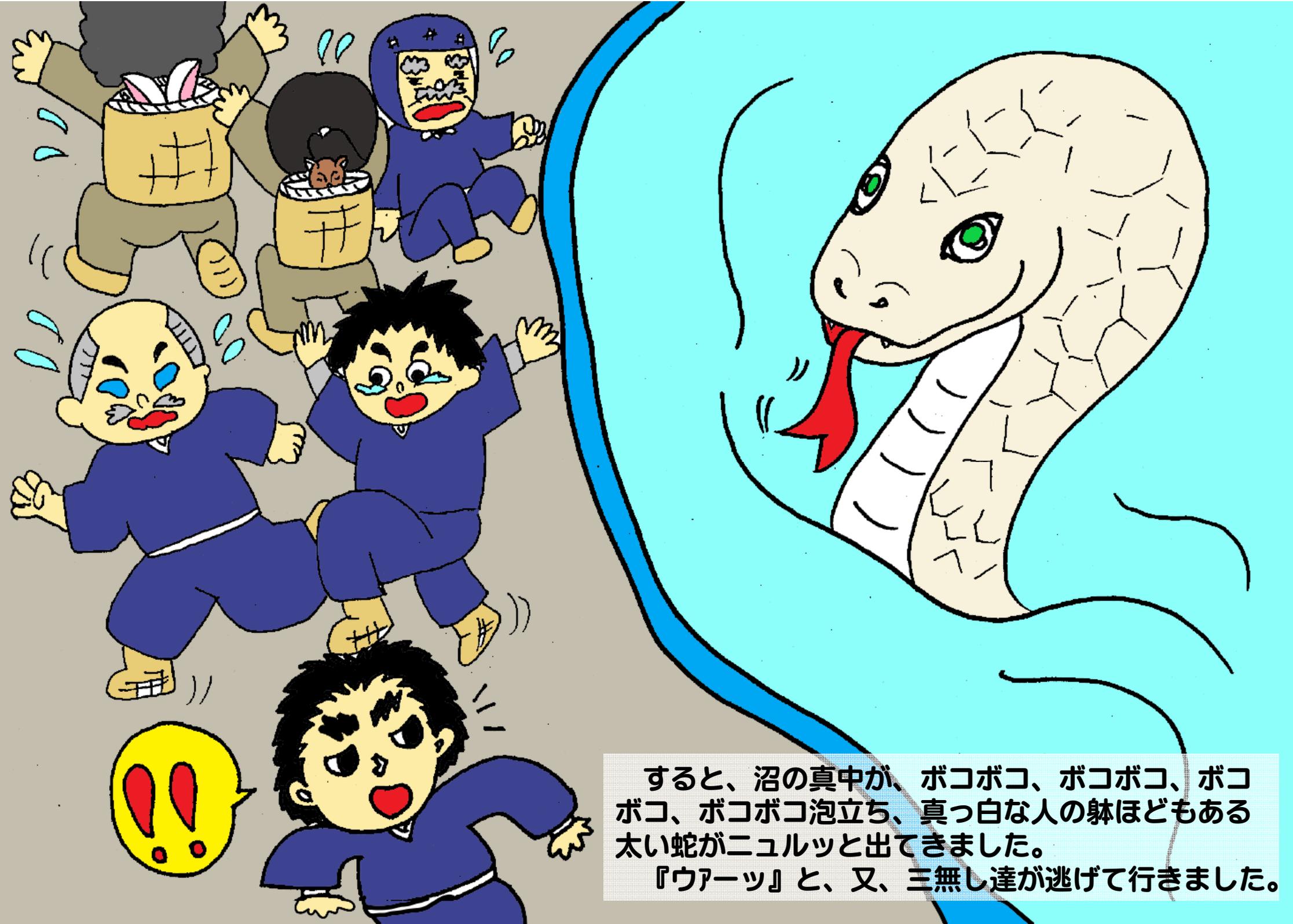
そして十日ばかり過ぎたら、ケロッと毛が一本も無くなりました。



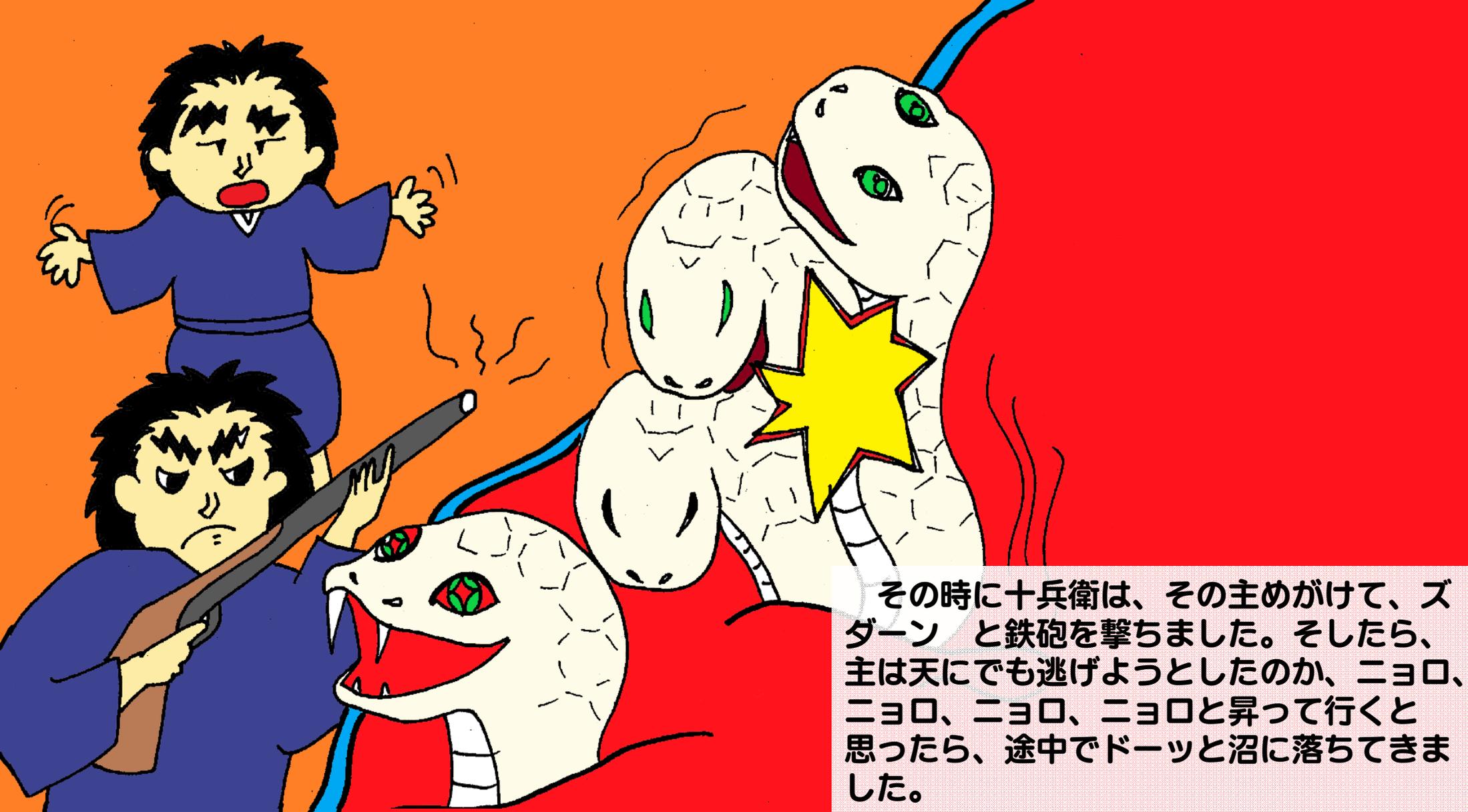
それから又、春になって、村の人達と組んで、又 山に獣を獲りに行きました。今度は相馬から長慶の沢を越えて、秋田の田代の森まで行きました。いっぱい獣を担いで戻ってきました。そうしたら、大きな沼があり、いちばん年の寄（い）ったマタギが『ほらほら、みんな見ろ、見ろ、あの沼見ろ。あの沼は千丈もあると云うほど深い沼だ。そして昔からあそこに主が居てこの辺の山を守ってるんだよ』って教えました。



そしたら、十兵衛が『何ア、何ア、何ア、主居るって、俺は生まれてから今まで主という者を見たことが無い、どんな、どのくらいの者なのか』『やめろ、やめろ』って云う皆の声も聞かないで、今度は木の枝を折り、沼を叩いで、『主一つ、出て来一い、お前はなんぼのもんだい、出て来一い』と叫びました。



すると、沼の真中が、ボコボコ、ボコボコ、ボコボコ、ボコボコ泡立ち、真っ白な人の躰ほどもある太い蛇がニユルツと出てきました。
『ウアーッ』と、又、三無し達が逃げて行きました。



その時に十兵衛は、その主めがけて、ズダーン と鉄砲を撃ちました。そしたら、主は天にでも逃げようとしたのか、ニョロ、ニョロ、ニョロ、ニョロと昇って行くと思ったら、途中でドーツと沼に落ちてきました。

そして、最後の力を振り絞って、ヒューツと顔をだしました。ちょうど、西の尾太（おつぶ）の山にお陽様が落ちて、空が真っ赤で、まわりの山も赤く染められ、沼の水も主の血で染められ、主の目も又真っ赤で、十兵衛を睨みました。

それから、誰も村の人達は十兵衛と一緒に山に行かなくなりました。『へん、さっぱりしたわ、年寄達と一緒にだと、あれは駄目、これは駄目、それ獲れば駄目、これ獲るなって、うるさくてだめだ、一人の方がさっぱりしていいわ』それから、十兵衛は一人で獣を獲りに歩きました。

秋になって、その日も朝早く獣を獲りにいきましたが、鳥一羽、兎一匹、見つかりません。『おかしいな、今までこんな事は1回もなかったのに、村で鉄砲撃ちの名人の俺が手ぶらで戻れば皆の嗤（わら）い者になるな、こりゃ、暗くなるまで戻れないな』と思い、ブサクサ、ブサクサ喋ってきたら、目の前の木と木の間をシュと横切ったものがありました。『それっ』と走って見に行ったら、それは猿でした。

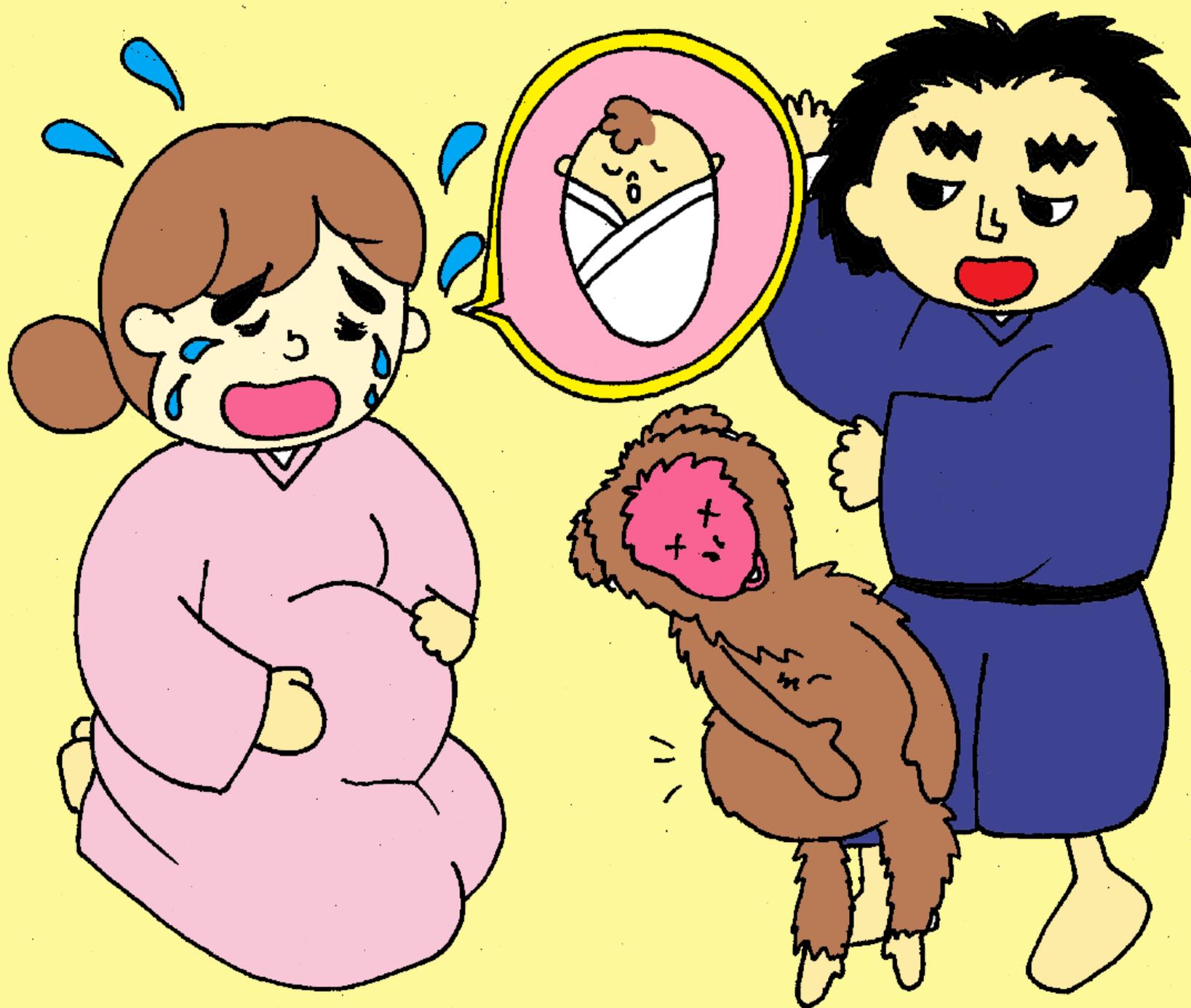


その猿はお腹が大きく、今にも赤ちゃんが出てきそうな大きさでした。



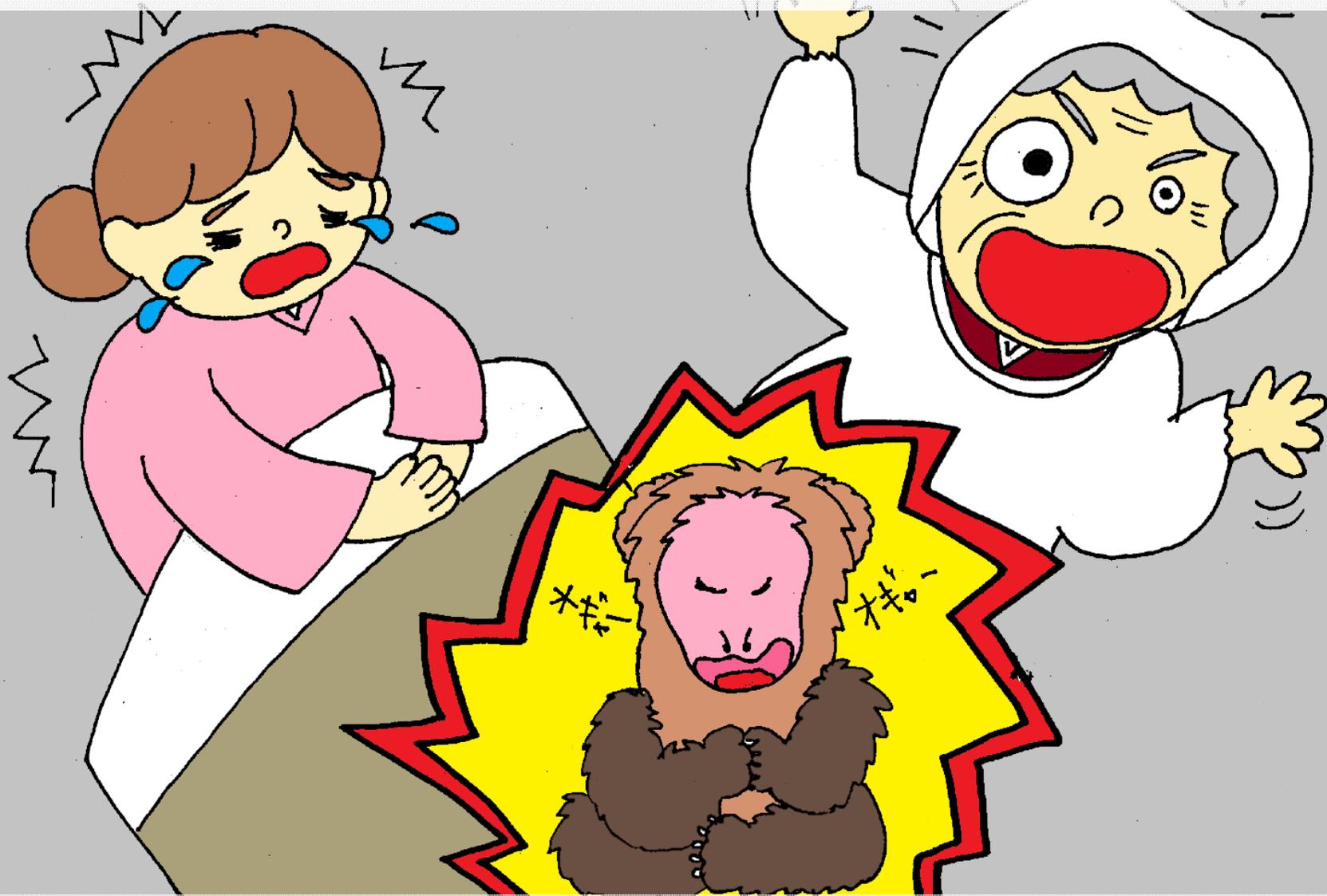
十兵衛は鉄砲を向けました。そうしたら、猿が木の上で助けてと手を合わせました。『この猿こりや、人の真似して、手を合わせて、お前はなんなんだ』って、ズダーンと撃ちました。

猿はクルッと一回転（まわり）し、下の石の上に落ちて死にました。それを手と足を縛って鉄砲の後ろにぶら下げ、家に帰りました。



嬪に『はい、今日のみやげだ』と投げました。嬪は『わーい、この猿、腹大きくて、今赤子産む猿じゃないか、私も来月になれば子ども産むときに、なんで、お腹の大きい猿を殺して・・・』って涙を流しました。

月が代わって、その日朝から十兵衛の嬢はお腹を病んでいました。病んで、病んで、病んで、病んで死ぬほど病んでもまだ出ないで、夜越して、次の日の朝にやっと生まれました。その生まれてきた赤子を見たら、手伝いに来ていた隣の婆さんは腰を抜かしました。手と足は熊と同じで、顔と体が猿と同じな赤子でした。何日もしないうちに亡くなりました。



次の次の年に、又、十兵衛の嬢が赤子を産みましたが、又、そうした男の子でした。『やっぱりなあ、昔から駄目だというものを殺したり、獲ったりしたから、祟りだありや、罰が当たったんだ』って村の人みんなして噂をして、誰も十兵衛の家に行かなくなりました。



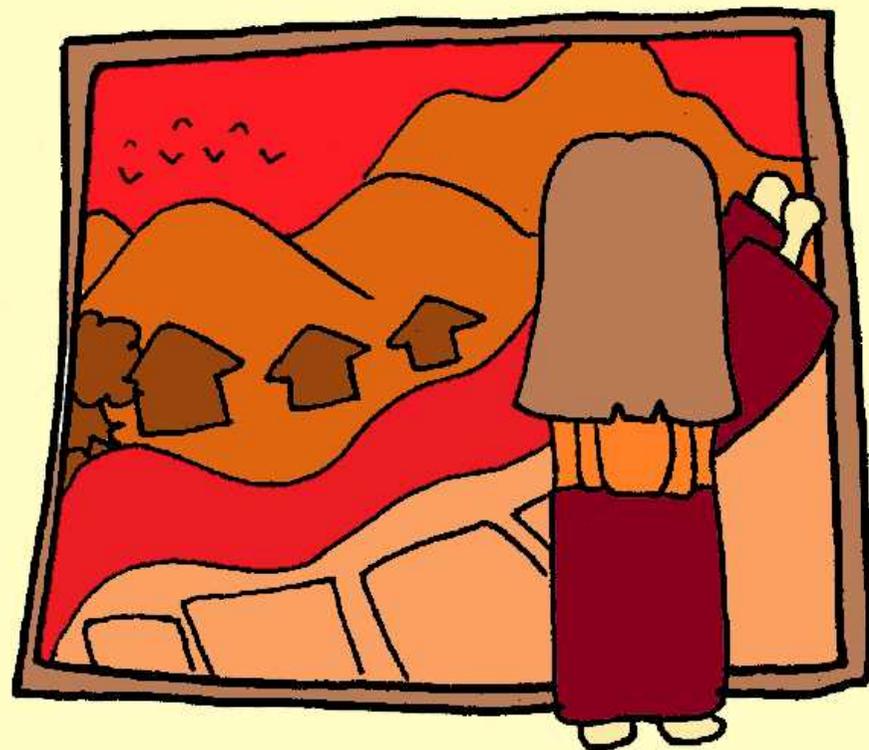
そして又、お腹が大きくなり、今度生まれたのは、女の子でした。『いやいやいや、こんな綺麗で可愛い子はお城の御姫様でも無いよ、これはこの国一番だ、村一番だ』って、『いち』って名前をつけました。おいちが生まれてまもなく、十兵衛の嬢がだんだん、だんだん体が弱って行って、弱って行って・・・死にました。

十兵衛はおいちを懐に入れて山に仕事に行き、おも湯を煮て食べさせ、なんとも可愛がって育てました。



そして、おいちが15歳を過ぎる頃、十兵衛は口は喋れるが、手と足はまるで縄で縛られたように、何も動かなくなりました。
『そら祟りだ、そら罰だ』って、村の人達は嗤（わら）いました。おいちは、自分で山に行き、木や実を取ってきて、庄屋様の仕事をして十兵衛を養いました。

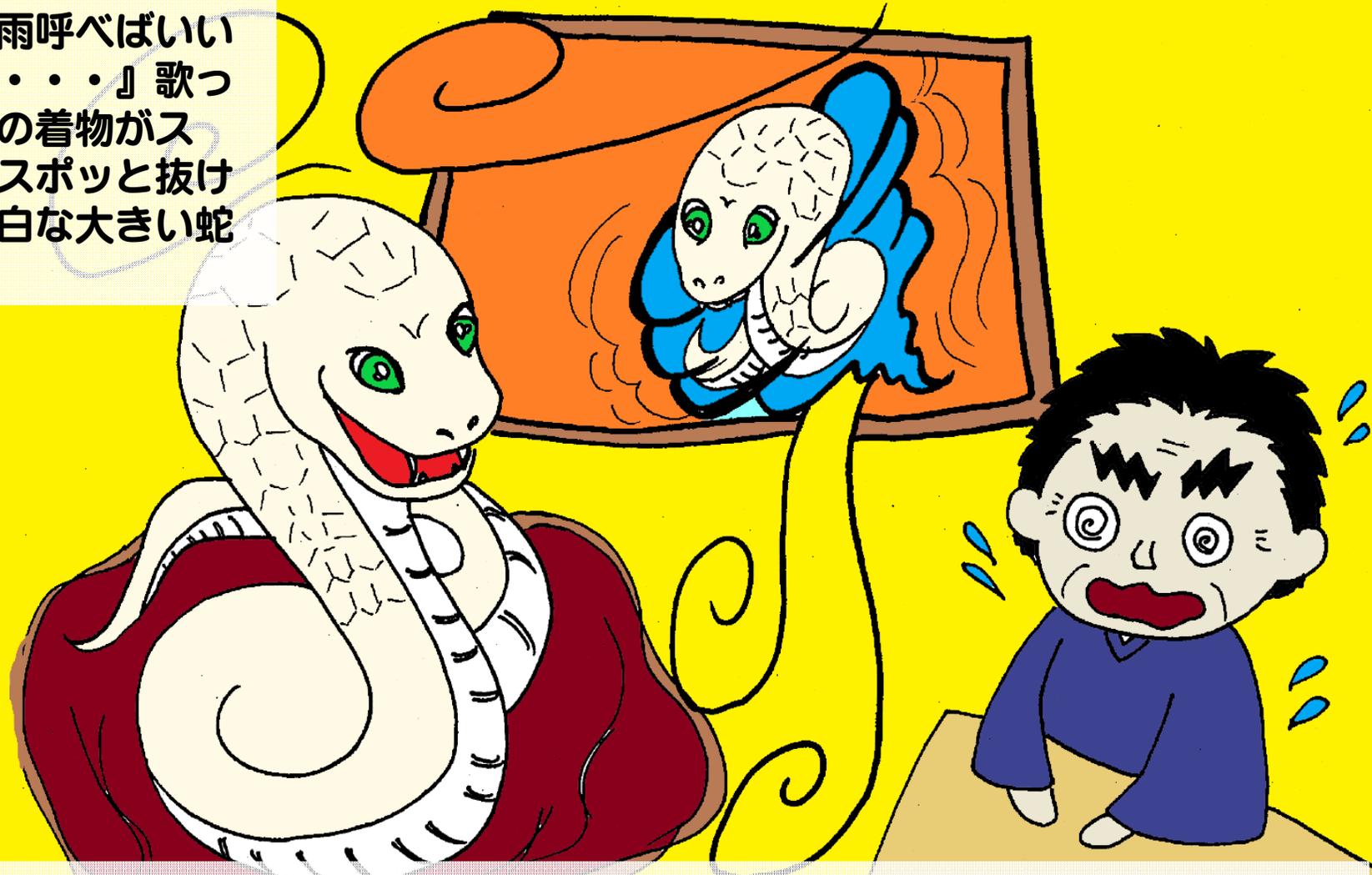




おいちが十六の秋になった時、十兵衛が『おいち、隣のミサもトシも皆 嫁に行くが、お前も嫁に行かなければならぬのだが、俺が無様なもんでどこへもやれないな』と言いました。そしたら、おいちが家の全部の窓と戸を開けました。ちょうど夕方で西の空が真っ赤でした。山の紅葉も真っ赤でした。それを見ながら、おいちは静かに歌を歌いました。



『風邪呼べばいいか、雨呼べばいいか、嵐呼べばいいか・・・』歌っているうちに、おいちの着物がスタートと落ちて、髪がスポッと抜けました。そして、真っ白な大きい蛇になりました。



『お父（どう）、解ったか、私が誰だかわかったらう。私はおまえに殺された沼の主だ。お母（が）の腹借りて、生まれ変わって、お前を殺しに来たけど、あんまり私を可愛がって大事に育てくれたので、仇討てないうちに、山に戻る時がきてしまった。いいか、私がいなくとも、お父（ど）一人で生きないとだめだよ』と喋ったら家の中にゴーツと風が入ってきて、おいちの体をぐるぐるぐるぐる巻いて、ヌゴーツと山の方へ流れて行って、おいちは何もなくなりました。

十兵衛はどうなったかという、手足が動かず、隣近所も誰も来ず、あとは死ぬのを待つばかりだ。生きていながら地獄に落ちた。

丁度、今、弘前の観桜会です。公園に行くと、サーカスやオートバイ、お化け屋敷など沢山小屋掛けている。あそこの前を通ってごらん。四十過ぎた親父、木戸銭とる所の前で腹巻きだして、銅鑼声（どらごえ）張り上げて叫んでいる。

『さあ、いらっしやい、いらっしやい。お代は見てから、お代は見てから。ご当地は初公開だよお客さん。見るは地獄、聞くは涙の物語り。信州は山の中。代々獣を獲って生業（なりわい）と

する獵師の家に、十月十日の日が満ちて、ある朝、おぎやあと生まれた女の子。山の怒りか、獣の祟りか、全身真っ黒の毛が生えていた。親の因果が子に報い、輪廻転生、世の倣い（なら）、花も恥じらう娘盛りを、流れ流れの旅の空。年は十八、名はお花。憐（あわ）れなるのは、この娘（こ）で御座い。お花さんよー、お花さんよー』

『あいよー、あいよー』幕の間から顔をぺろっと出して、引っ込めた。熊男や、狼男、河童男、蛇女など様々な見世物来る。本当にあのような化け物のような子どもが生まれ、売られてきたのでしよう。

人の命もひとつですが、獣の命も又ひとつです。獣だからと、やたらと殺すのはだめですよ

